
妄想の世界

兼一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妄想の世界

【Zコード】

Z0645Z

【作者名】

兼一郎

【あらすじ】

この小説は『魔法少女リリカルなのは』の一次創作です。

小説の内容は現実の世界から唐突にアニメの世界に無意識の内に移動してしまった人間が元の世界に戻る為に頑張りましょう、という健気でよくある一次創作のお話です。

二次創作もとい小説を書くのは生まれて初めての経験なので生暖かい目で作品を読者の方々に読んで頂ければ思つております。

『魔法少女リリカルなのは』の一次創作はたくさんありますが、そんな先の先人たちの作者様方の作品に私の作品が埋もれないよう

頑張りたいと思つておつます。

注意事項

- 『魔法少女リリカルなのは』の一次創作です
- この小説を読むにあたって以下の注意事項を読んでください
- ・作者はまったくの素人で小説を書くのは初めてです
 - ・非転生のオリジナル主人公がこの小説の主人公です
 - ・原作キャラクターを私なりに表現していますので原作とイメージが合わなくなるかと思います
 - ・小説の更新ペースが遅いです
- 以上の注意事項を読んでそれでも読んであげましょうという読者様方
- 作者の駄文ですが少しでも楽しい時間に費やせたらいいなと思います

壁に架けられた丸時計が午前1時を針で指し示していた。人の出入りが疎らになつた深夜のコンビニで会計を済ました若い男が片手にコンビニ袋を携えてコンビニから優々とした態度で出てくる。

若い男の名前は速水健一はやみけんいち。

歳は二年前に成人を迎えた二十一才。

今年、私立の大学の卒業をまじかに控えている大学四年生である。一年間という期間をかけて制作した卒業研究の発表を明後日に控え、自宅の自室でパソコンを前に缶詰状態だったので寝不足気味の健一はコンビニで軽い夜食を買い付けに来ていたのだ。

健一はコンビニ前に停めていた自分の自転車の前力ゴに夜食の入った袋を放り、自転車に跨るとペダルに足を降ろした。

深夜の静寂な雰囲気の中、健一の乗った自転車が人気のない住宅街の街道を街灯に照らされながら人が歩くより若干早い速度で進む。

「俺も今年から社会人かあ……」

寝不足で思考がうまく纏まらない健一は唐突に独り言を呟いた。四年間という大学生活に区切りをつけて今年、健一は四月を迎えると新社会人となる予定だ。

大学で友達が一人もいない自分が、まさか内定をいただける企業があつたことに健一は大学の卒業をまじかに控えた今でも信じられない。

”お前が想像している以上に社会は甘くないぞ”ふと健一の頭の中で厳しい彼の父親の言葉が唐突に過ぎる。

内定が中々決まらずに卒研も就活も諦めて部屋で閉じこもつていた健一に父が鉄拳制裁と共に彼に言った言葉だ。

健一の頬に熱い熱がこもる。嫌なことを思い出した、と健一は感情を高ぶらせペダルを漕ぐ足に力をこめた。

人気の無い住宅街を自転車で通り抜けようとペダルを漕ぐ健一に突然、違和感が訪れる。

健一の頭の中に唐突な頭痛を伴う耳鳴りが響くと同時に、彼が立つアスファルトの地面が縦横に波をうつて大きく揺れたのだ。

「地震つ？！」

頭痛を伴つた突然の大きな地震に自転車のハンドルを握るのが困難なほどに健一は驚いた。

だが、健一の周囲に佇む住宅街の家々は地面を大きく揺らす地震にまるで気がついていないように家の明かりひとつ、悲鳴ひとつあげることなく静寂だつた。

自分と周囲の温度差に違和感を感じながらも、健一は狼狽しつつ揺れる地面に逆らいながらなんとか自転車のペダルを漕ごうとした。ふと、健一は深夜の夜空に視線を移した。そこには風になびく力一テンのようなドス黒い何かが夜空の暗幕をオーロラのように揺らり揺らと波打つてなびいていた。

その不可思議な夜空の現象に健一は驚愕して目を奪われるが内心ではとても気分が良いものではなかつた。

普通のオーロラは見るものを惹きつけて魅了するが、健一の見たソレは見るものに不快感と嫌悪感そして苛立ちを与えるのだ。

「うう……う？」

健一の身体に異変が唐突に起きる。

健一は自転車の足を止めて深夜の住宅街の街灯の下で胸の内から込み上げてくる吐き気を抑えるようにその場で立ち止る。

「…………うう…………おええ…………」

健一は口元を両手で覆いながら吐き気に堪らず自転車のスタンドを立てるにもせずにその場で自転車を乱雑に倒した。自転車の前カゴから放り出されたオーバーギリとサンドウイッチが地面に漬々と転がり落ちる。

「…………も、もう、無理…………おええ…………」

唐突に襲われた原因不明の吐き気に堪えられずに健一は胸の中にあつた不快なモノを盛大にアスファルトの上に吐露した。

腹の中にあつた不愉快なモノ全てを吐き出すまで健一は肩で息をしながら吐き出し、衰弱して虚ろな瞳を浮かべると地面に吐露した汚物の異臭に眉をひそめた。

健一が吐く物を吐いてスッキリした落ち着いた頃には地面を搖らす地震も夜空に映る奇妙なオーロラも全て何事もなかつたように身を潜めた。

「いつたい、なんだつたんだ…………？」

突然、自分の身を襲つた吐き氣と異常気象と天変地異に健一は怪訝に思いながらも深呼吸をして体調を整える。

健一は地面に投げ出された食料を拾いあげて自分が吐露した汚物を遺憾ながらもそのまま放置して再び自転車に跨ると自宅に向かってペダルを漕ぎ始めた。

健一が彼の自宅に到着したのはコンビニを出てから一時間程、時間が経過した頃だった。

いつもより倍の時間をかけて帰宅した健一は自宅の庭に自転車を停めるとコンビニの袋を片手に自宅の玄関に向かう。

ポケットにしまってあつた家の鍵を取り出して玄関の扉の鍵穴に

鍵を差込み左に回す。鍵が開いた玄関の扉を開くと「ただいま」と寝静まる家族に挨拶をしてから家に入った。

健一は玄関から家に上ると明かりの灯らない廊下を進み、寝ているだらう家族を起こさないように抜き足で階段を一階へと昇つて自室に向かった。

普段どおり自分の部屋まで辿り着いた健一は部屋の扉を前にして唐突な違和感におそれた。

「なんだ、これ？」

違和感の正体は部屋の扉に『まやの部屋』といつファンシーなネームプレートが飾られていることだった。

コンビニに行く前には無かつた、身に覚えの無い飾りに何かがおかしい、という違和感を抱きながらも健一は扉を躊躇い無く開いた。開かれた扉の先にあつたのは速水健一の部屋であるはずである。だというのに健一の視界に映つたのはまったく別の主が住んでいる部屋だった。

扉を開いた瞬間に匂う女の鼻を突く香水の匂い。女らしい部屋のインテリアに彩られた男っぽい気が全く無い部屋の内装。そしてベッドの上で吐息をたてて寝ている見知らぬ若い女。

「……えつ？」

健一は絶句した。この場は確かに自分の家の筈だし、ここは自分の部屋だったはずなのにいつの間にか自分の知らない女が住み着いていたのだ。

部屋の内装も必要最低限のモノしか置いていなかつた健一の部屋は今では女らしい若い女仕様の居心地最悪な景観へと様変わりしていたのだ。

コンビニに出かける前までは確かに自分の部屋だったはずなのに、

「この短時間でどうやつたらいいまで部屋の内装を入れ替えることができるのか、そしてこの寝ててる女は誰だ、など色々と頭を痛ませる疑問が尽きないがとりあえずは健一は行動をおこした。

「あの、ちよつと。ここ俺の部屋なんですよナビ……。」

勝手に自分の部屋を改造して我が物顔で寝ててる若い女に健一は彼女の肩を激しく揺すり起こそうとした。

「…………うーん。まだ早いよ。寝かせてよお」

肩を揺する健一の手を払いのけて女は再び吐息をたてる。

「ちよつと、あんたつ！ いいかげんにして起きあわてばっ……！」

若い女のこつこつに田代覚めそつこ無こ態度に健一は怒つて毛布を引っ張がすと女をベッドの上から強引に引きずりおろすとした。これにはさすがに堪えたのか、若い女は意識を覚醒をせると額に青筋を浮かべる健一に文句を言った。

「もつ、やめてつて言つてるぢよつお父ちゃん？」

田代を覚ました若い女は悪態をつきながら健一の顔を凝視した。そして直ぐに驚愕した様子でベッドから飛び起きたと健一から逃げるよつこ部屋の角へと後退した。

「あ、あ、あんたつ！ いつたい誰なのよつー？」

若い女は長い髪を寝癖で乱れさせながら狼狽する。

女の意味不明な台詞と態度に健一はそれはこちらの台詞だと、怒

りを露にした。

「それせいかのひの台詞だつて。」リリは俺の部屋だつての。」

「はあ？！ なに言つてんのよ。」リリはあたしの部屋だつての。」

「こつからこじが女の部屋になつたんだよ。」リリはすうと前から俺の部屋だ！ 出で行けつ！」

「なに意味のわからないうこと言つてんのよ。 出で行くのはあんたの方よ！」

「なんだとう！」

健一は自分の部屋を勝手に模様替えしたにも関わらず部屋から出て行く気配やえ見せない傲慢な態度の女に拳を振り上げて詰め寄つた。

健一に詰め寄られて身の危険を感じ取つた女は顔を恐怖に歪めらせる。

「お父さーつんつー！ お父さーつー！ 助けてーつー！ 早く来てーつー！」

耳の鼓膜を過剰なまでに振動させる甲高い若い女の悲鳴に健一は目を白黒させて驚き、その場でたじろいだ。

深夜の住宅街の全域に響き渡るような悲鳴に家の周囲にある家々の窓に光が灯る。

「どうしたんだつー？ マヤつー！」

娘の悲鳴を聞きつけてドタドタと慌しく家中に足音を響かせて一階で寝ていた彼女の父親が一階に上がりつて来るとすぐさま健一の部屋に乱入してきた。

涙目で身体を竦ませながら部屋の隅で震える娘と見知らぬ若い男が娘に乱暴をはたらこうとしている瞬間を目撃した父親は健一に殴りかかった。

「うちの娘に何をした貴様あーつ！」

突然の不意打ちによる奇襲によつて健一は為す術も無く自分の知らない他人の父親に顔面をタコ殴りにされた。

状況が全く理解できない健一は娘の父親に殴られながらも「あんたらこそ俺の家でなにしてんだ！」と逆上しながらそれに応戦した。健一と娘の父親による大乱闘が狭い一室で行われている間に家の一階では娘の母親が受話器を手に取り警察に通報していた。

深夜の住宅街に響くパトカーのサイレンの音。その音を聞きつけて住宅街の家々から野次馬が飛び出してくる。

「娘の部屋に知らない男が……！」

家の一階から聞こえる母親の泣きそうな声。他人の父親と殴り合いをしながらも健一の耳にはその声がはつきりと聞こえた。

複数の人間が慌しく階段を上つてくる足音。そして健一の部屋にゾロゾロと大所帯で現れた制服に身を包んだ公僕ども。

「若い男の身柄を拘束しろつー！」

公僕のひとりの一声でその仲間達が暴れる健一の身柄を容易く拘束した。

多勢に無勢とはこのことか。健一は大人しく公僕に身柄を拘束さ

れながら「二二二は俺の家だ！」と一点張りの主張を続けた。

だが詳しい話は署の方で聞く、と警察官に話を聞いてもらつ二二二も出来ずに健一は身柄を拘束されたままパートカーに乗せられた。

「……それで君は自分の部屋に戻つたら見知らぬ人間が居ただけだ、と言いたいんだな」

「だから、さつきからそつ何度も言つてはいるじゃないですか！」

二二二は警察署にある取調室。パイプ椅子に座り事務机を挟んで健一と警察官が問答をしていた。

「だが、あの家に速水健一といつ男が住んでいるなんて届出は出でない」

「そんな馬鹿な！？ だつて俺はあの家で家族と一緒に二十二年間住んでいたんですよ！」

唐突に告げられる冗談にしてもたちの悪い真実に健一はありえない頭を横に振つた。

「だから、君がいうその家族も速水健一が住んでいたなんて記録はどこにもないんだ」

「そんなことがあるわけがないですよー、俺と家族は確かにあそこで暮らしていたんですよー！」

事務机を激しく叩いて健一が警察官に激しく抗議するが警察官は依然と健一の供述を信じようとはしない。

そして警察官はおもむろに制服の内ポケットから事務机の上に健一の運転免許証を提示した。

「話は変わるが、君から押収した財布の中に入っていた自動車の免許証のことなんだが……」

事務机の上で自分を見つめる運転免許証の「真の自分を指で指示しながら健一は抗議する。

「ほり、ここを見てください！ 免許証に自分の住所が書いてあります！ これが俺がアソコで住んでいる証明になるはずです！」

身分を証明するのに便利な免許証を警察官の前で示すことで健一は自分の口述に嘘は無いと言いたかった。

だが、警察官は健一の言葉に眉をひそめると不機嫌そうに顔をしかめた。

「そりゃないんだよ。これさ、よく作られてはいるが君の持っていた免許証は全くの偽物だ」

「……え？？」

健一は信じられない、と首を横に振り警察官の瞳をすがるような目で見た。

そんな健一の視線を目を逸らして警察官はイライラした苛立ちを表情に露にしながら厳しい口調で言つ。

「どこのこんなモノを作ったんだ？」

「俺はそんなことしていません！」

「じゃあ、どーで手に入れたんだ?」

「俺はちゃんと教習所に通つて、免許センターで試験に合格したから、その後に発行してもらつて……」

「嘘を吐くんじゃないつ！」

ドンっ！と警察官が健一を脅すような表情で事務机を叩いた。机を叩かれて健一は身をビクッと竦ませる。

「持つている免許証は偽物といい、さつきから『マカセの供述しか
しない。警察を舐めてんのか！』

「俺は嘘なんて言つていませんよ!」

「それが嘘だつて言つてんだ！」正直に話せないから何でも考へつてもんがあるんだぞ？

警察官はその場で椅子から立ち上かると乱暴に速水の胸倉を掴み拳を握り締めて振り上げた。

胸倉をつかまれて息が詰まりそうな状態で涙目ながらも健一は警察官に自分は嘘を吐いていない、と供述を続けるがその口に警察官の握り拳が叩き込まれた。

警察官は更に乱暴を続けた。

「ほら、はやく本当のことを言えー。いつちな、お前の戸籍すら無い事は判つているんだ！ おまえ、さては日本人に成りました不法入国者だな？」

「お、おれは、日本人だし……戸籍が無いなんて、ありえるはずがないですよ……！」

警察官に床につづくまり身体を足蹴にされながらも健一は声を大にして叫んだ。

「口答えするな！ 現に貴様の戸籍が無かつたんだからお前は不法滞在者になる。おまえ、どこの国から日本に来たんだ？ 田的はなんだ？ 金か？ 女か？ それともクスリか？」

「そんな身に覚えの無いことを、俺が知っているわけがないじゃないですか……！」

「まだ言つかつ！ この犯罪者の分際で調子に乗りやがつて……！」

無抵抗な健一を暴力で屈服させる尋問は一昼夜続けられた。

尋問の結果、健一から口クな情報を聞き出せなかつた警察は健一の身柄を拘束して警察署にある拘置所に一旦、閉じ込めることに決定した。

警察に心身ともにボロボロになるまで身に覚えの無い罪で尋問を続けられた健一は冷たくて暗い拘置所の中で三日間、獄中生活を続けさせられる」ととなつた。

三日間の獄中の中では健一は自分の身に起つた出来事を頭の中で整理しようとしていた。

コンビニに買い物に行つた帰りに奇妙な出来事と吐き気に襲われた。

次に健一が自宅に戻るとそこは見知らぬ他人が住んでいる彼の自宅ではない他人の家だった。

そして健一が持つっていた本物のはずの免許証は偽物で彼の戸籍が

嘘のように抹消されていた。

……まるでパラレルワールドに迷い込んでしまったようだ

現実的な考えではない御伽話のようなキチガイじみた考えを獄中にいる間に健一はそう結論づけることとした。

どこか自分の知らない、でも、とても自分の知っている世界によく似た他の世界に突然迷い込んでしまったのだ。

健一はそんな途方もない妄想を頭の中で考えつつ、この妄想とも現実とも判断出来ない世界を憎んだ。

警察官からの理不尽な暴力による憎しみ。自分の居場所をどこの馬の骨とも知れない他人に奪われた憎しみ。大学の卒業をまじかに控えていたのに全ての苦労が水の泡と消えた憎しみ。

……憎い、憎い、憎い、憎い。

そんな理不尽な現実に、自分の平穏な生活を唐突に奪つた現実に健一は獄中の中で世界を呪つた。

一台のパトカーが都心の大通りを車の流れに身を任せながら走つていた。

そのパトカーに乗車しているのは運転手の警察官が一人と後部座席にはひとりの若い青年を挟み込んで座る警察官一人。合計で四人の人間がパトカーに乗車していた。

このパトカーは不法入国と不法侵入それから身分詐称に偽造という罪を負つた容疑者の青年を刑務所に移送する任をおびていた。

慎重な運転でパトカーは人通りが激しい道路の交差点に差し掛かると赤信号につかりその場で信号待ちの車列に加わった。

「おい、あれなんだ？」

その声は交差点で信号待ちをしていた彼女を連れた年若い男の声
だった。

「えつ？ なにか言つた？」

年若い男の隣で佇み、彼と一緒に信号待ちしていた彼女は交差点の騒がしい人々の喧騒に耳を奪われて彼の言葉が良く聞こえなかつたので聞き返した。

「ほら、あれだよ、あれ」

彼は天高く頭上を指差して彼女に指し示した。それに釣られて彼女は彼が指差す方に視線を移す。

交差点の周りに伸びるビルの間から覗く狭い空に輝く一点の蒼い光。それは真昼の快晴の空の色よりも濃厚な蒼の色だった。

「ほんとうだ。でも、とっても綺麗な光……」

どんな深い海の色よりも蒼く、どんなに天高く仰ぐ蒼鷹の空よりも綺麗な蒼の光に彼女は目を奪われた。

交差点で信号待ちをしている他の人間たちもその蒼い光に気が付くと皆が空を見上げた。

「あれ？ なんだか、あの光が近付いてきているような……」

視界に映る蒼い光りが段々と光源を空に広げて天から地へと落ちていく。落下予想地点は都心の交差点。人間が蟻のようにひしめく都會のど真ん中だ。

「やばいんじゃねえのか……！」

真っ直ぐに自分達の居る場所に向かつて墮ちてくる正体不明の蒼い光に若い男は慌てた様子で彼女の手を握りるとその場から逃げ出すように踵を返した。

そんな一組のカツプルの行動に周りの人間達も悲鳴をあげながら交差点から逃げ出す。

都会のど真ん中は秩序を失つた人間達の阿鼻叫喚な悲鳴と喧騒に包まれた。

赤信号を無視して交差点を渡り出した人間達の姿をパトカーの中から警察官が拡声器を口元に押し付けて叫んだ。

「落ち着いてください。慌てず、落ち着いて、信号を無視しないで……！」

パトカーの車内からは空から落ちてくる蒼い光が見えないので警察官たちは突然起こつた人々のパニックに意味が判らずに怒声を上げることしか出来なかつた。

人間の理性を失つた悲鳴が聴こえてくる。人間の恐怖に怯え逃げ惑う姿が視界に映る。

人間の、人間の、人間の、人間の……！

「アハハハハハハハッ！ こんな妄想の世界は、ぜーんぶつ消えて無くなっちゃえればいいんだッ！」

狂つた機械のように笑い、狂言を口走り、世界の破滅を懇願する人間の名前は速水健一。

理不尽な現実を呪い、憎しみ、破壊することを選んだ青年。

パトカーの中で突然、笑いだした健一に彼を挟んで両隣に座る警

察官の顔が引きつる。

その瞬間、健一が乗るパトカーに天空から墜ちる蒼い流星がピンポイントで衝突した。

一瞬の静寂の後にパトカーは天井に大穴を開けて中に居た人間を巻き込みながら爆発した。

第1話（後書き）

この作品の主人公は次元震によつて現実からリリカルな世界に移動してしまつた人間のお話です。

主人公の健一はリリカルなのはの知識は持ち合わせておりませんのでハーレムな世界を目指して頑張ります、といったオリ主ではあります。

元の世界に戻る手段を捜してリリカルなのはの世界で奮闘する男のお話を描きたいと思っております。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

「おい、見てみろよ。ほら、一番前の席でまたアイツが座つてやがんの。マジで友達いねえのな」

「うわあ。ほんとだ。マジで笑えるんだけど。大学に来てまで友達がいないとがないわー」

……つるせい

「君ねえ。こんな基礎的な事が判らないでどうやつたら卒研が出来るわけ？ もう一度、一年生からやり直した方がいいんじゃないの？」

「なーんで、俺がお前の卒研を手伝わなきゃならねえんだよ。教授から頼まれてもお断りだわ。でもなあ、どうしてもつていうんなら……ほら、誠意を見せろよ。お金でな」

……だまれ

「えーっと、うちの会社がやつてることに興味があるからうちを志望した、ねえ……。うちは社員全員が横つながりが大事な職場だから君みたいな暗い子はいるないかな」

「はつきりと言つとや。君、大学で友達いないでしょ？ あー言わなくていいよ。一目見れば判るからそういうの。人付き合いが出来よくな人はうちじやなくても採用しないよ」

……口を閉じろ

「おまえさあ。なんで飲み会に来たの？　あれほど来るなつて念を押したよね？　それでも来るつて馬鹿なの？　死ぬの？」

「おまえが来たせいで飲み会の雰囲気がメチャクチャだよ。責任とつてみんなの分のお金、てめえで払えよな」

……死ね

頭の中で浮かぶ映像と音声。それはまるで一人っきりの映画館でスクリーンに写る映画を鑑賞しているように感じられた。

それにもこの映画館はクソだ。人の神経を逆撫でするクソ映画しか放映できないクソ映画館だ。

映画の主演はもちろん俺。それで出演者は糞学生に糞教授、それから糞人事に糞チンピラ。

こんな胸糞悪い映画は生まれて初めてだ。映画を製作した監督の顔面にワンツーパンチーの後で金的をくらわしたいぐらい胸糞が悪い。

「ねえ。どうだつた君の映画は？」

映画の暗転したスクリーンにローマ数字の『?』という文字だけがやけに存在感を放ちながら映し出される。

「どうつて、こんな糞映画は生まれた初めて見たよ。こんな映画を作った監督の顔を拝みたいぐらいだ」

速水健一は映画館の椅子に深く腰掛けでどこからともなく耳に聞こえてくる声に答えた。

「お気に入りがなかつたのかい？ それはそれは残念」

残念と全く思つていないのであつ。謎の声の主の口調はとても明るく弾んでいた。

「Iの映画は君のためだけのものだし、この映画の監督は君なんだよ。速水健一くん」

「なるほど。どうで出来栄えが糞な筈だ」

「まだ続きがあるけど観て見る？」

「もうこことよ。これ以上、こんなものを見せせられたら泣こちやうか」

「ひ

「残念」

今度は本当に残念そうな沈んだ声で謎の声の主が答えた。健一は椅子に腰掛けながら不快な気分を忘れるよつに一度深呼吸をすると両手を閉じた。

「茶番はもういいだらけ。俺を元の場所に帰してくれないか

「元の場所？ それは、”どうち”のこと？」

瞳を閉じた深い闇の中で左右を中央で分断した光景が映る。

左半分には自分の部屋でキーボードを忙しそうに打ち込んでいる速水健一の姿が映つている。

右半分には警察官に両隣を挟まれ、両手には手錠をかけられた身動きが取れない速水健一の姿が映つている。

「もちろん。左の方に決まつてんじゃん」

健一は迷つことなく左半分の自分の姿を指名した。

「残念。」そつちは選べないよ

左半分の光景が唐突に霧のように焼き消えると健一の視界に映るのは自分が警察に捕まつてゐる姿だつた。

「どうしてだよ？」「あつち」が俺の元いた場所で合つてゐる筈だし、俺が戻りたいのも「あつち」の世界だ。間違つても「こつち」じゃない

「そう言われても困つちやうな。何の因果か君は「あつち」の世界から「こつち」の世界に迷い込んでしまつた迷子ちやんなんだよね」

「俺は自分の意思で「こつち」に来たわけじゃない！ 知らないうちに「こつち」に連れて来させられて、俺がどんな理不尽な目に遭つたのか知つてんのかよ」

「うん、知つてるよ。ほら」

健一の視界にノイズが奔りまるでチャンネルが変わるように視界が切り替わる。

すつきりした画面に映るのは警察署の取調室で警察官に乱暴な暴力と身に覚えの無い罪で尋問されながら罵声を浴びせられている男の姿だ。

床で頭を抱えて蹲り「やめてください」と泣きながら何度も警察官に懇願している速水健一の姿が臨場感たっぷりに映し出されてい

た。

「酷いよね。痛かったよね。苦しかったよね。悲しかったよね。とても、惨めだったよね」

「やめろ……」

「”あつち”から”じつち”に来てしまつただけなのに、自分には身に覚えの無い濡れ衣を着せられて堪つたもんじやないよね」

「やめろっ！」

「ほり、君を弄つてゐる警官の表情を見てみなよ。とーつても愉しそう。弱い物を虐めるのが大好きなのかな？あの顔は本当の人間の中身を曝け出しているとは思わない？」

「そんなものを俺に見せるんじやねえ！」

「ちよつと待つてよ」

健一は謎の声の制止する声を振り切つて一人ぼっちの映画館から逃げ出した。

だが、映画館の出入り口の扉を開いた瞬間に健一は声を失う程の絶望を味わうことになる。

「やつと見つけたぞ、犯罪者」

それは先ほど視界に映る映像の中で見た顔にそっくりだった。それもそのはず、健一を精神的にも肉体的にも痛めつけた警察官の男が扉を開いた先で待ち構えていたのだから。

「ひいっ……！」

健一は悲鳴をあげると直ぐにその場で踵を返し警官から逃げようとしたが華奢な健一の肩を「ゴシゴシ」とした逞しい警官の手が掴む。

「逃がさねえぞ。わあ、今日も愉しい尋問タイムの時間だ」

「嫌だ、否だ、イヤだ、厭だ、嫌だあああああっ！」

「まずは景気づけに一発いつてみようか」

「ふざけるなあーっ！　あんたの”顔”なんて見たくないいいつ！　消えて無くなれええええっ！」

半狂乱になりながら健一は自分の肩に載った警官の手を振りほどく。そして警官に向かって頭突きを加えて警官を正面から押し倒して活路を切り開いた。

警官が尻餅をついている間に健一は肩で息をして過呼吸で息が苦しいほどに精神を乱して映画館の出口の扉に手を添えた。

その瞬間、扉を開いた健一の視界は白一色の日映い、目を開けることすら苦しいほどの光の渦に包まれた。

「おかえりなさい。現実への生還おめでとう」

意識が朦朧として呆然とする健一にかけられた言葉の第一声は難とも理解することのできないものだった。

頭の中で直接声が響いてくる。聴覚から得られる情報ではなくて頭の中から直接、何者かの声が聞こえるのだ。

「……あ……ん……た……誰……？」

「うん。 まず初めに自己紹介したいところだけじ、 まず初めに君がおかれている状況を周りを見て確認したほうがいいんじゃないかな」

謎の声に促されるままに健一は自分の周囲の状況に目を向けた。そこにあつたのは都会特有の高いビルの数々と渋滞のように車列を並べる車たち。そして遠巻きに健一を眺めている沢山の人間たちの視線。

「違う違う。 そっちじゃないよ。 下を見るんだ。 君の足元だよ」

健一は頭に響く声に逆らうことなく自分の足元に視線を落とした。そこにあつたのはアスファルトの地面に横たわる人間が三人。三人とも警察官のように警官の制服に身を包み、まるで死んでいるかのように身動きひとつしないし、呻き声ひとつあげることもない。

なるほど。 合点がいった。 三人の警官の首から上が無くなっているんだ。 だから誰も喋らないし動かない。

健一はその凄惨な光景に納得がいくとその場から一歩後退してみた。するとブチューと足元で何かが潰れる音が耳に聞こえた。そして男の苦痛に歪む悲鳴も聽こえた気がした。

「ああ、 踏んじゃった。 今、 君が踏んだのは『田玉』だよ」

健一が何を踏んでしまったのか彼の頭の中の誰かが簡潔に教えてくれる。

「田玉を踏み潰せるなんて一生に一度とない機会だから残りの田玉

も踏んじやいなよ。あと五つ残ってるよ」

とても軽い口調で残虐なことを健一の頭の中で何者が告げる。健一はその声に従い視線を足元に移して三人の死体の傍を注意深く探した。

なんてことはない。死体の傍には割れた頭蓋骨の破片と頭を覆う肉片、それから脳漿とフグの白子みたいな何かが飛び散つており、その中に光を失った五つの目玉が転がっていた。

「左から順に数えて三つ目と四つ目の奴が君を痛めつけた警官の目玉だよ。これはチャンスだ。あの警官に仕返しできる絶好の機会だよ」

その言葉を聞いて健一は動いた。足元に転がる人間だつたモノをグチャグチャと踏み潰しながら健一は前進する。

お気に入りの靴が汚れるが今は気にすることはない。あの警官に仕返しができるのだから。

健一は辿り着いた。首から上が無い警官の死体の傍で自分を見上げる光りが灯らない虚無の瞳を。

そして躊躇うことなく目玉を踏み潰した。左足で警官の元左目を、右足で警官の元右目を踏み潰した。

ブチユツブチユツとふたつの目玉が潰れる音が健一の耳に届く。そして靴の裏に感じる感触をゆっくりと確かめながら更に地面を踏みにじる。

「あーっはっはっはっはっはー！ ザまあみり、ザまあみりー！ これがこれがアンタの結末だ！ これがアンタの最後だ！ 僕を弄る時にアンタもこんなに気分の良い想いをしていたんだなー！」

胸の内からスッとするとしても心地の良い気分に健一の感情が高ぶ

つた。

「俺はアンタに弄られる理由は無かつたし、アンタを弄る理由なんてなかつたのに。おっさんが悪いんだぜ？ 俺の話を信じなかつたおっさんが悪いんだからな」

残つた田玉を余すことなく全部踏み潰した健一は汚れた自分の靴に眉をひそめると警官の死体で綺麗に足裏を拭つた。

田を疑うよくな凄惨で残酷な光景に健一の一部始終を遠巻きに見守つていた人々は悲鳴を上げてその場から逃げ出す者がいれば、失神する者、携帯電話のカメラでその光景を撮影する者など様々な人間がいた。

「気が済んだかい？」

「ああ」

周りの騒がしい喧騒を無視して健一は頭の中で響く不思議な声に気分よく答えた。

「ところで、さつきから姿の見えないお前はいつたい誰なんだ？」

「僕かい？ 僕は『ジュエルシード』」

「じゅえるしーど？ なんだよ、それ」

聞いた覚えの無い単語に健一は怪訝そうに聞き返した。

「簡単に言つと途轍もない魔力を秘めた魔法の石つてところかな」

「冗談にしても、もつとマシな嘘は吐けないのかと健一は苦笑する。

「魔法の石？ なんでそんなモノが俺の頭の中で喋つてんだよ。無機物が人間様と口を利いてんじゃねえよ」

勝手に許可も無く自分の頭の中で屈座る謎の声の主に健一は啖呵をきつた。

「そこは、ほら。魔法の石だから”意思”を持つていてるから喋れるんだよ」

健一の思考が途切れる。

今のは場を和ませる馴熟落のつもりだらうか？

「信じられないが冗談じゃないみたいだな。馴熟落は余計だつたけど魔法とやうりを信じよ」

「今のトコ笑うといふだよ

「さすがに”石”のジョークは人間の俺にはわからねえよ

健一は笑えない自称”魔法の石”のジョークに苦笑する。そして三人の警官の死体を「//」の見るような目で眺めながら”魔法の石”に尋ねた。

「それで、これをやつたのはお前か？」

「お前だなんて他人行儀だなあ。僕と君は運命共同体なんだ。だから僕のことは名前で呼んで欲しいなあ」

「じゃあ、じゅえんしーべ。お前がやつたのか?」

「違う違う。僕の名前は《ジュノルシード》シリアルナンバー《?》。だから”AINSH”と呼んで欲しいな」

馴れ馴れしいただの古いひの言動に健一は苛立ちながらも舌打ちをしてから再度”AINSH”に尋ねた。

「警笛を殺したのはAINSHなのか?」

「もうともこえるし、違うともこえる」

「どういって?」

「僕はそつも君の願いをひとつだけ叶えたんだ。その願いの結果、この人間たちはみんな頭がお亡くなりになつたんだよ」

「俺の願いだつて……?」

健一は自分が何時、魔法の石に願いをかなえて欲しいと願つたのか記憶を掘り返してみたがそのような記憶は全くなかった。頭を悩ましながら腕を組んで唸る健一にAINSHが健一の頭の中で直接声を響かせる。

「君は望んだはずだよ。『あなたの”顔”なんて見たくない。消えて無くなれ』ってさ」

「あれは夢じゃなかつたのか? そんな願いは無効だ、無しだ! それなら俺を元いた場所に還してくれよ!」

「あの時、言つたはずだよ。”あつち”の世界は選べないって

「どうしてだよー。」

アインツの言葉に納得できない健一は声を荒げる。

「君の境遇が特殊すぎるから。僕は君を連れて次元を越えて他の多元世界に移動させることはできるけど、君の”元の世界”には連れてはいけない」

「なんでだよ」

「難しくて説明しずらいんだけど、君の世界は多元世界みたいにハツキリと次元で別れた世界じゃなくて”枝分かれ”した可能性の世界なんだよね」

「意味判らん」

サイエンスフィクション系のオカルト話にはまるで感心が無い健一にはアインツの説明は理解出来そうになかった。

「僕もよく判つてないんだ、ごめんよ。そしてその”枝分かれ”した可能性の世界へ移動するには僕だけの力じゃ魔力が全然足りないんだ」

「それじゃあ、魔力が足りれば俺は元の世界に帰ることが出来るんだな」

「うん。可能性としてはず口じゃない」

「アインツの言葉を聞いて健一はその場で嬉しさのあまりに飛び跳ねた。

「じゃあじゃあ、アインツの魔力を世界の壁を越えるまで増やすにはどうしたらいいんだ？」

「正確には魔力を増やすんじゃなくて魔力を集めるんだ」

「魔力を集める？」

「話がややこしくなつてきたので健一は腕を組んでアインツの言葉を一字一句聞き逃すまいと耳を傾けた。

「やつだよ。なんの因果かこの多次元世界に《ジュエルシード》が僕を含めて21個の魔法の石が空から降り注いだんだ。だから他の《ジュエルシード》を君が集めればいい」

「じゃな右も左も判らない世界で21個の石を捜し出せだって？」「無理を言つた

「無理なことを言つてのけるアインツの言葉に健一は落胆する。肩を落として落ち込む健一にアインツが元気付けるよう言つた。

「無理じゃないよ。そのために僕がいる。どんなに離れていても《ジュエルシード》の魔力反応を感じできる僕がね」

「それが本当なら希望が見えてきたぞ」

「やつ、諦めるこまだ早いよ」

AINSTの言葉を全て鵜呑みにして完璧に信じじやつていてる健一はAINSTに絶大な信頼を寄せた。

元の世界に戻れる手段があるというのならAINSTの言葉を信じて、この理不尽な世界で宝探しに興じるのも面白いことかもしれない。

「でも他の《ジュノルシード》を探す前に君にはやうなくちゅいけないことがひとつだけある」

「ん？ なんだよ」

「まずはこの状況から生き残つてみせることだね」

健一の頭上を騒がしい騒音をたててヘリコプターがグルグルと旋回している。

そして健一が居る都会の交差点の四方を警察の装甲車とパトカーが道路を封鎖して一般市民を交差点から締め出していた。

AINSTとのお話にかまけていた間に健一は警察とその機動隊に周囲を取り囲まれていた。

まるで映画のワンシーンのような状況にこの場の主役である速水健一は額に冷や汗を搔いて困った様子で頭を搔いた。

「この状況を俺一人でどうにかしらうてこいつのか？」

「そう言いたいけど僕と君は運命共同体だからね。微力ながら力を貸すよ”相棒”」

健一の頭の中とてても頼りになるAINSTの声が響いた。

「僕が君に与えた特別な力は《HEAD SHOT》。すなわ

「そんなグロテスクな技はいらねえよ。俺がグロ吐いちまつ」

「そんなグロテスクな技はいらねえよ。俺がグロ吐いちまつ」

「そんなグロテスクな技はいらねえよ。俺がグロ吐いちまつ」

「その心配は必要ないよ。魔法の力の対価に君のもつ”理性”を貰つたから。どんなにグロテスクでショッキングな場面も怖くないはずだ」

「しつと勝手に俺の”理性”を奪わないでくれないか？」

健一の了承も得ずにアインツは勝手に人間の”理性”を魔法の力の対価として奪つてしまつたようだ。

その事実に健一は飽きれることを通り越してアインツに不安を抱いた。

「だつて君のメンタルはとても脆いから人間の頭が弾け飛ぶところなんて見たら失神してしまうだろ？ それじゃあせつかくの魔法の力が宝の持ち腐れだよ」

健一の内面を熟知したアインツの言葉に健一は押し黙る。

確かに『HEAD SHOT』なんて説明を聞くからに物騒な魔法の力を使えるほど健一の精神は強くは無い。

それを見通してアインツは健一から”理性”を奪つたというのなら健一がアインツに感謝する理由はあっても怒る理由はないはずだ。

「ほりほら、黙つていないで早く魔法の力を使いなよ。モタモタしていると君が『HEAD SHOT』されて死んじゃうよ」

仲間を殺されて殺氣立つ警察官と機動隊の面々の憎しみと怨みのこもった視線を一点に受けて健一は息を飲んだ。

だが、その殺氣を受け止めても健一の胸の内に憂いや悲しみ、それから人間を殺してしまった後悔の念は何一つ浮かんでこない。

これが”理性”を奪われるという意味なのか、と健一は落ち着いて理解した。そして自分に魔法の力を使つよつに強要するアインツに肯定の意味をこめて頷く。

「この世界は元から君のいるべき場所ではない。君の居場所はどこにも無いし、帰るとこも無い。この世界で君は文字通り”独り”なんだ」

「言われなくとも理解してる」

胸を刺すようなアインツの言葉に健一は悔しそうな顔をして同意した。

「でも安心していい。君が元いる場所に還るその瞬間まで僕はずつと君と共にある。まさに”運命共同体”だよ。君が死ねば僕も死ぬ。だから君には死んでほしくない」

「俺にはアインツの力が必要だ。元の世界に還るのにお前の力が必要だ。だから俺もお前に死なれたら困る」

「これは契約。魔法の石とその力を必要とする人間との契約。

「それなら抗おう。この理不尽な世界で抗おう。君が息途絶えるまで僕も一緒に命を懸けて闘おう」

「闘つてくれ、力を貸してくれ、この俺の為だけにアインツー！」

健一の身体にとても心地の良い高揚感が包まれる。それはきっと魔法の力。健一の知らない、人間が理解出来ない不可思議な異能の力。

「額に手をかざして」

アインツの言葉に従つて健一は自分の額に左手の掌をかざす。掌がとても熱い。火傷してしまったようなほど熱いエネルギーが健一の額から溢れ出していた。

健一の額には植物の種のような形をした碧眼の瞳を思わせる結晶体が額に埋め込まれていた。その結晶体が『アインツ』でもあり『ジユエルシード』である。

結晶体が目映いばかりの光の奔流を溢れ出してそれを見る者たちの目を惹いてやまない。

健一は額にある異物の感触を掌で確かめるように優しく触れた。

『『HEAD SHOT』』起動確認。『type gun barrel』』 展開開始と同時に四方への制圧射撃を開始

アインツが機械的な口調で健一に告げる。

すると健一の背後からいくつもの砲身が顔を覗かせた。それは銃というにはあまりにも纖細で綺麗な宝石のように輝く結晶体の集合体だった。

なにも無い空間から突如として現れた宙に浮いた”銃”のようなものに警官隊と機動隊たちは怖気づいて一步後退した。

「これから一方的な虐殺が始まる。これから理不尽なまでの殺戮が行われる。でも悲しまないで。君達人間の尊い犠牲は健一の生きる

糧になるのだから

アインツが警官隊と機動隊の人間たちの頭の中に直接語りかける。

「不思議な”因果”と奇妙な”縁”で結ばれてしまった僕達のこの先に幸がありますよに……」

一瞬の静寂。機動隊の一人の隊員が盾を構えて緊張のあまり唾を飲んだ。

「てえつ！」

健一の意思がアインツの引き金を引く。

この瞬間、日本史上初めての異能者との戦闘記録が歴史に記されることになる。

その戦闘記録には異能者『速水健一』の名前とその残虐非道な経歴から『人類の敵』と記されていた。

第2話（後書き）

「J意見・「J感想をお待ちしております。」

「はあつはあつはあつ。特ダネ特ダネ。こんなビッグなネタを撮り逃してたまるかつてんだよ！」

息をゼエゼエと息苦しそうに吐きながら壮年の男が人気の無いビルの非常階段を屋上へと向かつて昇っていた。
非常灯の頼りない灯りを頼りに薄暗い非常階段を息を切らしながら疲れて限界を迎えたうな両脚に鞭を打つて壮年の男が階段を昇つていた。

顎に無精髭をたくわえ時折口元から涎を垂らして必死な形相を顔に浮かべて走る壮年の男の名前は柴田英雄しばたひでお。

柴田は「ゴシップ記事専門を取り扱うフリーのジャーナリストで会社ではいつも窓際の席で肩身の狭い思いをしていた。

そんな彼が何故、こんなにも必死になつてビルのエレベーターを使わずに非常階段を昇つているのかといえばそれは彼が今いる場所が立ち入り禁止区域だからだ。

詳しい事情は柴田には判つていながらスクランブル交差点を中心には半径700mに亘つて警察と機動隊の介入がありその地域は関係者以外の立ち入りが禁止されたのだ。

柴田もその例にもれず立ち入りが禁止されているのだが警察の警備の目を盗んでスクランブル交差点から300m程の位置にあるビルに飛び込むことに成功した。

柴田のジャーナリストとしての長年の勘が彼に告げるのだ。誰も目にしたことの無い特ダネがすぐ目の前にあるのだと柴田の本能が告げるのだ。

「つおらあつ！ 邪魔だつてんだよつー

鍵の閉まつたビルの屋上へと続く固い扉を蹴破ると柴田は空がとても近く感じられるビルの屋上へと出た。

興奮のあまり息を肩でしながら柴田は落ち着きの無い様子で屋上の上でウロウロと特ダネを捜して歩き回る。

そして柴田は片手に民生用ビデオカメラを携えてカメラを回しながら屋上の端へと移動した。

「おいおい、マジかよ。冗談じゃねえぞ……」

息を呑んで特ダネを見逃すまいとカメラを必死で回しながら柴田はビルの屋上からスクランブル交差点を見下ろした。

柴田が見たのはまさに特ダネとしてはトップクラスになるのは間違いない。新聞の表紙を飾ること間違いないトップニュースを柴田はカメラで撮影し続けた。

「なんて数の人間の死体だ。ひいふうみいよお……ちくしょう数えきれねえか。オレは戦場のカメラマンになつた覚えはねえぞ」

カメラのレンズの先にあつたのはスクランブル交差点の中央を中心にして輪を描くように囲む人間たちの死体だ。

そもそも100人ときかない数の警察官と機動隊と思われる人間達の首から上の頭が消え去つた死体が山のようアスファルトの上で横たわっていた。

地獄の血の池を再現したらきつとああなるだろつ。

人間の『耳』『鼻』『目』『歯』『舌』『頭蓋』『脳』が皮膚を突き破り肉片を四散させて血の海に転がつていた。

咽返りそうな濃厚で鼻を突く血の臭いと凄惨すぎる現実離れした光景に柴田は口元を掌で抑えた。

そして柴田は見てしまった。屍の山の頂で唯一生きている人間がひとりだけいる姿を認めてしまった。

「生存者？ それにしても若いな……男か？ それにしては少し様子がおかしかねえか？」

ビデオカメラのズーム機能を駆使して柴田は生存者ひとりにピントを合わせてカメラを向けた。

若い男はカメラの先で頭の無い死体の身体を手探りで何かを探すようにさぐっていた。

「……笑つていやがる」

柴田は驚愕した。若い男は屍の山の中で宝探しでもするように愉悦しそうに笑顔を顔に浮かべているのだ。正氣の沙汰ではない。

PTSD（心的外傷後ストレス障害）？ それとも物狂い？

柴田は考えられる限りの可能性を思考したが何故、若い男がひとりだけ笑いながら死体の山の中にいるのか到底理解できなかつた。何故、この時柴田が若い男こそ屍の山を築いた張本人だと考えられなかつたのか？

それほど現実離れした光景だつたし、たつた一人の人間に一百では潰しのきかない機動隊の人間達が頭を奪われたなどと考えられるほど柴田はブツ飛んだ思考を持ち合わせてはいられない。

「……ん？ なにか言つてはいる。独り言か？」

ビデオカメラの先で若い男が誰かと話すよつに身振り手振りでその場で忙しそうに喋つていた。

死体に向かつて話している様子は無い。それならいつたい誰と話しているのか？

柴田は注意深くカメラで若い男の様子を観察していると不意に若い男と目が合つた。

「つー?」

気が付かれた!

柴田は慌ててその場で身体を低くして屋上の壁に身を隠す。緊迫した状況に逃げ出そうかと思つたがこのまま特ダネを逃せるはずも無い。

柴田はしばらく大人しくして、その後で様子を窺いカメラの撮影を続行することに決めた。

「驚いたなあ。こんな近くにマスクの人間がいたなんて……」

「なんだとう?！」

安心していた柴田の背後で不意に聞こえた若い男の声。

突然の来訪者に心臓が飛び出すかと思つほど驚きを見せると柴田は背後を振り返り、その人物に視線を向けた。

柴田に睨まれるようななかたちで彼の正面に立つ来訪者は凄味がある柴田の様子に肩を竦ませた。

「おまえ……どうやつて此処まで昇つてきた」

物怖じしない柴田の問い掛けに来訪者は当然と言わんばかりに答えた。

「もちろん。エレベーターを使ってですけど」

来訪者の答えに柴田は満足がいかず真実を追究するジャーナリストの癖で声を荒げて再び問い合わせる。

「さっきまでおまえは交差点の中央に居たはずだ！ こんな短い時間で、一瞬と言つてもいい短時間でどうやってここまでやつて来た！」

柴田の問い掛けに不敵な笑みを浮かべて来訪者は口を開いた。

「魔法を使つてですよ。オジサマ」

その瞬間、来訪者の額に埋め込まれた結晶体が淡い光を漏らした。

それはまさに一方的な虐殺だった。人間が為す術も無く圧倒的な力量差で、人知を超えた魔法の力に蹂躪される様はまさに地獄絵図だった。

「すーっげえなあつ！？ これが魔法の力つて奴なのか”AINNT”！ チョーッ気に入つたよ。この『HEAD SHOT』つていう魔法の”銃”は最高だよ！」

「氣に入つてもらつて何よりだけど、まだ闘いは終わつていないよ健一。戦闘が始まつたら敵を全て排除するまで安心出来ないんだ。氣を抜かないようにしないと、いつか死んでしまうよ？」

「うんうん。わかつてるわかつてるつて……！ 次の獲物は正面12時方向の一個師団。その両翼を殲滅しつつ退路を断つてやれ……！」

一瞬で数え切れないほどの人間の頭が風船のように膨れ上がり四散して肉片を飛び散らした。

防護ヘルメット越しに頭が破裂した人間がアスファルトの地面に

肉片がミックスされたヘルメットを転がして前のめりに倒れた。

「本当にわかっているのかな……」

阿鼻叫喚の人間達の助けを求める声をBGMに速水健一は額に埋め込まれた魔法の石の”ジユエル・シーク”アインツ”から授けられた魔法の力『HEAD SHOT』を駆使して人間達を蹂躪していく。

「ば、ば、化け物だあ！ 後ろへ下がれ下がれ！ 応援が来るまで持ちこたえられない！ 撤退つ！ てつたーいつ！」

「逃がさねえんだよ！ 警察は皆殺しだ！ 公僕は皆殺しだ！ 権力の犬は皆殺しだ！ ゼーんぶ俺の目的を邪魔する人間は皆殺しだ！」

健一に背を向けて逃げ出す機動隊の人間達に健一は”宙”に浮く”銃口”を向けて自分の”意思”で引き金を引いた。

たったそれだけのことで人間の頭が四散して飛び散る。それが魔法『HEAD SHOT』の力。一撃必中で人間の頭を逃すことなく四散させる狂氣の異能の力。

「あーっはっはっはっは！ 気持ちがいいなーっ！ なんだろう？ 胸の内から込み上げてくるこの気持ちは？ なんだこの感情は？ ”この世界”の何もかもを犯したくなるってんだよ！」

健一の背後で”宙に浮かぶ結晶体”的”銃”は肉眼では捉えることができない”魔弾”でコンマ一秒の間に百発の以上の魔弾を発射することが出来た。

サタンが十一枚の背中の羽を開くように健一の背後にも四方に展開した十一柱の”凶器”が人間の頭をピンポイントで抉り、碎き、

粉碎する。

「お楽しみのところ悪いんだけど、ちょっとだけ僕の話を聞いてもらひてもいいかな?」

健一の頭の中で直接透き通つた声が響いた。その声の主こそが“AINSHI”であり健一の額で輝く魔法の石である。

「どうした? 新手でも来るのか?」

健一は攻撃の手を緩めると周囲の環境に注意深く気を配りながらAINSHIの言葉に耳を傾けた。

「安心して、新手じゃないよ。でも、それよりもちょっとだけ厄介なことかな」

「なんだ?」

「言葉で説明するよりも自分の“眼”で見ててくれたほうが理解できると思つから少しの間、健一の視覚と聴覚を拝借するよ」

AINSHIが言葉を言い終えた途端に健一の視界にノイズが奔る。

「うわつ! ? AINSHI! 大丈夫なのか、これ?」

「痛いとか苦しいとか無いから安心して」

まるでテレビに映る砂嵐の画面をゼロ距離から見つめているような視界の移り変わりに健一は不安を抱いたがAINSHIの信頼に値する言葉に安心して身を任せた。

健一の視界に映る砂嵐が徐々に薄つすらと晴れてくる。

晴れた視界に映つたのは無音で何かを中継するテレビの女子アナウンサーらしき女性と彼女の背後に映る上空から見下ろしたスクランブル交差点だ。

「視野は問題なさそうだね。それじゃあ次は音量を調節してみるよ」

『……………。これ…現…』

ブツ切りで耳に聞こえてくる何かの音声らしき声に健一は眉をひそめるとアインツに注文した。

「もつと音量を上げてもうつていいか。なにを言つてるのか判らん」

「了解。ちょっと待つてね」

『……………！ 私達は現在 ×市のスクランブル交差点、その上空に居ます。ご覧頂けているでしょうか？ 私達の眼下に拡がるそこには警察の機動隊の面々が地に伏して……』

それはまさに健一が居るスクランブル交差点の上空から実況中継するテレビクルーたちの姿だった。

健一は頭上を見上げた。そこには警察のヘリに紛れてテレビ局のロゴマークが刻まれたヘリコプターが健一の頭上をグルグルと旋回していた。

テレビの電波を傍受してアインツが健一の視界と聴覚を使って見せたかったのはさぞやうらやま茶の間のワideonショーラジ。

「これがアインツが言つ厄介な事なのか？」

「うん。だつてこれつてこの世界の人間達全てに君の存在を露呈しているつてことだろ？ 今更だけど、この世界で君の行動を制限してしまつよくなことになりかねない」

ついに自分もお茶の間でテレビデビューか、と健一は苦笑しながらアインツが云わんとすることを理解した。

「いいんじゃないのか？ 遅かれ早かれ、この世界の連中は俺が”異能者”だつて気付くだろ？ それにもつ手遅れだろ……」

健一は視界に映るワイドショリーのレポートを搔き消すと現実の景色へと戻り、そこに拡がる惨状をアインツに両手を開いて示した。

「もう後戻りすることなんてできない。この世界の人間をたくさん殺した。だから俺は殺した奴の仲間や友人、それから家族や恋人に一生怨まれながらこの異世界で元の世界に還る為に『ジュエルシード』を集めなくちゃいけない」

健一の目的はあくまで『ジュエルシード』の回収。でも違う世界から来た健一には頼れる家族も知人もいない。むしろ敵が多すぎる。この世界全てが敵だ。

健一の目的を果たすには敵である人間を殺すのは仕方が無い。障害は排除しなければならない。

異世界の人間が死ぬ。そんなこと健一が知ったことではない。

「もし俺に殺された家族の怨みで幼い子供が包丁を手に持つて突進してきたら俺は躊躇い無くその子供の首を”銃”で打ち抜くと思つ

健一は頭上でプロペラの回る騒音を響かせて空を我が物顔で飛んでいる複数のヘリコプターに向かつて銃口を向けた。

12柱の結晶体の凶器が銃口で天を突くように発射態勢を整える。

「だつて俺は死にたくないもん。AINTSも死なせるわけにはいかなもん。俺は自分の居た世界に還る為なら、女子供だらうが俺の命や目的を脅かすようなら……」

異世界で生きている生物の命など自分の命を奪る」と比べたら鳥の羽より命の重さが軽い。

健一の”意思”が異世界で生きとし生けるものを標準に捉えて狙い打つ。

銃声は無音。ただ空気を裂いて何かが上空を旋回するヘリコプターに向かつて飛んでいったことは明らかだった。

健一の視界がテレビのチャンネルを切り替えるように再びワイドショーのレポートに映像が切り替わる。

『キヤーッ！？ 首が、首が……操縦している人の首が……』

悲鳴をあげて顔面を蒼白にしながら女子アナが現場のレポートを忘れてヘリの操縦席を指差した。

カメラマンは女子アナの様子に怪訝に思いながらも女子アナが指差す方にカメラを向けた。

そこに居たのは操縦桿を握り正面を向いて佇む首無し頭無しのヘリコプターのパイロットの姿があった。

『おいつ！ ヘリの高度が落ちてゐるぞー』 そのままだと墜落す……

そこでレポートは強制的にテレビ局のスタジオへと映像が戻ることで中断された。

スタジオでは番組の司会であるタレントがとても氣まずそうな顔をして無言で立ち尽くしていた。

健一の視界が現実に戻る。そして複数のヘリコプターが上空で旋回しつつ高度を徐々に下げて墜落していく様をその瞳に焼き付けた。

「『臨兵闘者皆陣烈在前』（臨める兵、闘ひ者、皆陣烈れて前に在り）」

「なんだ、それ？」

「『I』の世界で『九字』といふ言葉らしい。今の健一にぴったりの言葉だと思って言つてみたんだけど雰囲気出るでしょ？」

「『九字』ねえ……やっぱり俺が元いた世界とあまり変わらないんだなってつくづく思つよ。そういうの聞くと変わらないもん」

「『I』は『地球』だし『日本』といつ国だからね」

「初耳なんだけど……なんで今になつてそういう大事なことを言つかな……」

「だつてこの世界は君の世界から”枝分かれ”した可能性の世界だからね。それほど違はないよ」

「本当にパラレルワールドってやつなんだなあ」

健一はアインシとこの異世界に呆れて溜め息を吐くと周囲を見回した。

生きている人間の気配は健一ただひとりとなつたスクランブル交差点には健一ひとりが凄惨とした死臭が漂う場所で呆然と立ち尽くしていた。

「戦闘は終わったみたいだし、これから戦利品をもらいに行こう」

「戦利品？ なんだい、それは？」

「俺は今、自分の財布を警察に没収された無一文のドン底貧乏人だからな。一応この世界でどれ位かは知らないけど生きていかなくちゃいけないから、その生活に先立つ資金を貰おうと思つ」

「金錢かい？ 君にそんなものは必要ないと思つけどなあ。欲しい物は奪えればいいじゃないか。人間達を殺しても」

アインツの当然と云わんばかりの口調に健一は苦笑した。

「俺は”理性”を失くしても人間社会で生きる”常識”は失っていないよ。人殺しは娯楽じやないし、この世界でも犯罪だと理解しているけど、闘わなくちゃ生き残れないから仕方なく殺しているだけだ」

「人殺しが”常識”って言つたって説得力がないよ。僕には健一達人間の考えは判らない。だけどとも健一には惹かれるんだ」

嬉しいことを言つ、と健一はアインツの言葉に微笑んだ。

「魔法の石には判らないかもね。『無用な殺生はいつか身を滅ぼす』なんて言葉があるような国だから」

「やつぱり僕には意味が判らないよ」

「”じつち”での生活が落ち着いたら、そのときはアインツと腹を割つて話そう」

「僕には割れるような”お腹”ないよ」

「言葉のあやだよ。そのまんまの意味で受け取るなっての」

健一は自分の額に埋め込まれた魔法の石を軽く掌で叩くと苦笑した。

この異世界で唯一自分の味方でいてくれるアインツに健一は生まれて初めて家族以上の信頼をアインツに捧げていた。

それは家族以上に安心できる居心地と精神の安定を約束をされる存在。健一の希望の星。

「死体を漁ろう。服の中に財布ぐらい入っているはずだから」

健一は屍の山を崩しながら首から上が無い死体の身体に手を突っ込み金銭類を搜した。

健一の予想通り、呆気なく大量の財布が死体のポケットから見つけ出すことが出来た。

その回収した財布のひとつを開くと中から小さな写真が一枚ヒラリと風に乗つて死体の上に落ちる。

「妻子がいたんだな……」

写真の中で幼い女の子を抱きかかえて、隣に佇む女性と一緒に笑顔を浮かべて微笑む男。

家族団欒の笑顔の輪を写した写真を死体の上から拾い上げて健一はそれを縦に破り捨てた。

「どうして破つたんだい？」

「どうしてだろ？俺があの写真の中で微笑む女の子の父親を殺したこと後に悔の念や怒りがあつたわけじゃないんだ。でも、どうしてか胸が締め付けられて写真を見ていられなかつたから破いた」

「そつか」

死臭と一緒に風に乗って一つに裂かれた写真がスクランブル交差点の上空へと天高く上つていく。

それを眼で追いながら健一は自然と視線を上空へと向けた。

「ん？」

健一の視界の隅で一瞬、何かが閃いた。

健一が見上げる視線の先、都会のビルの間に生える少しだけ他のビルより背の低いビルの屋上で何かが閃いた。

「視力を魔力で強化してみようか」

そんなことまで出来るのか、と喉元まで出かけたが健一は無言でAINN'Sの言葉に頷いた。

健一の瞳に魔力の力が宿る。すると高性能の双眼鏡を覗いているように健一の視力は人間の限界を超えた。

「ビルの屋上でこっちをずっとカメラで撮影しているオジサマがいるな……」

肩手持ちのビデオカメラを健一に向けて顎に無精髭を蓄えたいかもジヤーナリストっぽい壯年の男がビルの屋上から健一を盗撮していた。

「あつ隠れちやつた……」

遠く離れた位置から屋上にいることを健一に勘付かれたことに気が付いた壮年の男は慌てた様子で身を隠した。

「ほつとく訳にはいかねえよなあ」「……」

「『HEAD SHOT』を使って撃ち殺しちゃいなよ

AININGが躊躇うことなく田撃者を健一に殺すことを提案する。だが健一は腕を組んで「むう」と唸りながらAININGの提案を済つた。

「たぶんあの人はマスクミの人間だ。この世界のことなら大体のことは知っているはずだし、『ジユエルシード』の情報を集めるのには一番、適した人材だと思つ」

「それじゃあ……」

「うん。殺さない。あのオジサマにほこの世界で俺の為に働く”協力者”になつてもらおう」

「自分の為だけに人間に労働を強いるのって”奴隸”っていうんだよ

「細かいことは気にしない。かく、どうやつてあのビルの屋上まで移動しようか

「僕の出番だね」

「アインツ?」

「”転送開始”しまーす」

「あつちよつと、おいコラ」

狼狽する健一を無視してアインツは魔力を膨らませて、その魔力で健一の身体を包み込む。

健一の身体が魔力で編まれた箱の中に収まるとスクランブル交差点から速水健一は跡形も無く姿を消した。

「魔法だつてえ？ うんなもん信じられるかよ。こちとら腐つてもジヤーナリストだ。そんなオカルトを信じられるほどジヤーナリズムの世界は甘かねえよ」

「（）もつともな意見だと思います。でも事実は変わりませんから」

ビルの屋上で二人の人間が対峙していた。

ひとりは速水健一。そしてもうひとりは柴田英雄。

柴田は健一の額で光る結晶体にチラチラと興味がアリアアリの視線を向けて言った。

「おめえさんに訊きたい事がいくつもあるんだが、ひとつだけオレに教えてくれないか」

「なんでしょ（）？」

健一は首を傾げて柴田の質問を待った。

柴田はしばらく間をおいてから深呼吸すると息を大きく吸い込ん

でから口を開いた。

「下の惨状はお前がひとりでやつたのか？」

「一人じゃないですよ。”アインツ”の協力があつてこゝを出来たんです」

即答。間を置かないで人殺しをしたことを宣言した健一に柴田は恐怖で背筋を凍らせた。

こゝはそういう”いつて”やがる、と柴田は健一から一步後ろへ後退して距離を置いた。すると健一も柴田を追つよつて一步前に前進。柴田の顔が引きつった。

「一人じゃないと言つたな。”アインツ” 誰だ、それは」

「次は」ひから質問です。交互に答えましょうよ、ね？」

健一が更に一步前に前進する。それに合わせて自然と柴田は後ろへと後退する。

柴田が自分から距離を置こうとする行動を面白がりに觀察しつつ健一は左手の掌を額の”アインツ”にかざした。

「アインツ。《 HEAD SHOT 》起動をせり」

「了解」

柴田は健一の不可解な行動の意味が読めず、更に一步後退した。健一も柴田を追つて前進する。

柴田は自分の眼を疑つた。健一の背後の空間が歪み出したのだ。

そしてその歪んだ空間からとても大きな結晶体で出来た”銃”の
ようなものが自分に向けて銃口を構えているのだ。

「な、な、なんだっ！？ なんなんだ、それは！」

「俺が質問する番ですよ」

狼狽する柴田の質問を無視して健一は笑顔を柴田にむけると両手を開いて芝居がかつた口調で口を開いた。

「大事な質問ですからよーく考えてからお答えくださいね。さてあなたに質問です。『今死ぬか』後で死ぬか』どっちがお好みですか、オジサマ？」

柴田英雄。四十四歳、独身で妻子は無し。自分の命を天秤にかけた一生に一度しかない質問に柴田の心は大きく乱されることになる。

「いひいつ台詞死ぬ前に言つてみたかったんだあ」

間の抜けた緊張感の欠片も無い声の主は速水健一。可能性の世界からやつてきた一般人は自分の台詞に心を酔いしながら柴田の返事を気長に待つた。

第3話（後書き）

「J意見・「J感想をお待ちしております

人口密集地にあるアスファルトの地面から空を日掛けて竹の子のように生えるビルの摩天楼。

人間が創り出した無機質で冷たいコンクリートのジャングルは世界の自然を破壊して人間好みの生活環境へと変貌させていた。

『健一、日が暮れてきたよ』

「ん、もうそんな時間なのか。観てみなよ”アインツ”綺麗な夕焼けだ」

コンクリートの階の天辺。空が近いビルの屋上で速水健一は地平線の彼方でゆっくりと沈んでいく紅の夕日に向けて感慨深く呟いた。

『見えるよ、健一。』この世界も夕日が沈む景色は絶景なんだね』

健一の感想に彼の額に埋め込まれている宝石が夕日の暖かい光を反射しながら同意するように答えた。

「ああ、”他の世界”の夕日は知らないが”この世界”の夕日が沈む景色もなかなかのものなんじゃないか？」

『うん。とっても綺麗だ』

「やつか。”魔法の石”的お前にこの景色の御墨付きを貰えるのならきっとどんな世界でも通用するんだろうな」

センチメンタルな気分に浸りながら健一は視線を沈みゆく夕日から人気の無い屋上の端に移した。

そこには宙に浮いた虹色に輝く結晶体で出来た幻想的で現実味がない”銃”のようなモノに銃口を向けられて堪らない想いで後ずさる中年男性が居た。

「そろそろ、俺の問い合わせへのお答えをいただいていいですか、オジサマ」

「そのオジサマってのはやめろっ！ 男のてめえに言われても色気がなくて氣色が悪いわ！ オレには柴田英雄っていう名前があんたつての！」

柴田は撮影用のビデオカメラを大事そうに胸の内に抱えて口調を荒くしながら健一の言葉に反論した。

命の危険に身を晒されながらも精神を強く保ち、なおかつ啖呵をきる余裕さえもある予想外の柴田の反応に健一は面食らつた様子で呆気にとられる。

『随分と肝が据わったオジサンのようだね』

健一の額の上でずつと柴田の事を観察していたアインツが柴田に対する第一印象を健一に淡々と告げた。

「そもそも、てめえの質問からしておかしいんだっての。なにが『今死ぬか後で死ぬか』だ。結局のところオレはてめえに殺される結末しか用意されていないってことじゃねえか」

柴田は自分がおかれている状況を冷静に判断した結果、自分がこ

の場で殺されることと後で殺されることを理解してなおも健一に食つて掛けた。

「いいか、オレはジャーナリストだ。人間社会の最前線で玉砕覚悟の気持ちを持つていつもオレは色々な修羅場をカメラひとつ身体ひとつで取材してきた」

柴田の瞳に壯絶な力が宿る。その眼光に気圧された健一が後ずさつた。

「暴力団の抗争から麻薬の取引現場、児童の人身売買に、はたまた違法カジノ。そうだなあ……最近だと『龍^{ロシ}』なんて呼ばれていたテロ組織の跡を追っていた」

淡々とした口調で説明しながら柴田は自分の取材人生を想起して頸にたくわえた無精髭を片手で擦る。

柴田の想像以上に危険な仕事っぷりに興味を抱いた健一は柴田に向けていた銃口を静かに降ろして話を促した。

「解るか？ 上つ面だけの平和の裏にある悪意に満ちた世界にオレは魅入られた。好奇心の塊みたいな人間のオレの性分は我慢できねえんだよ。禁忌を知りてえ！ ってな」

禁忌に魅入られた人間のみせる世界の話は異世界に移動する前まで普通に暮らしていた健一にはとても刺激が強かつた。

沈む夕日の光を背中に受けて柴田はニンマリと”普通”の人間が見せることはない歪んだ笑顔を健一に向けた。

「人間の醜くて汚く、卑怯で欲望に満ちたえげつねえ世界。オレはそんな世界を、オレの想像を、期待をいつだって超えてくれる素晴

らしい世界を全部知りてえ！」

それは好奇心というにはあまりにも度を越えた思考回路だつた。常人では理解出来ない境地に柴田英雄という男は確かに存在している。それを健一は彼の言動から理解した。

「だから、オレはてめえみたいなオカルト電波全開のイカレ快楽殺人鬼でチンコ押つ立てサイコバス下種野郎にくれてやる命はねえんだよ」

常人では理解出来ない境地にいる男からの罵声もまた常人ではなかつた。

酷い言い草の柴田に健一は額に青筋を浮かべて引きつた作り笑いをした。

結局のところ柴田は健一に殺される気など微塵も無いし裏世界の全てを知り尽くすまで自分は死ぬ気も殺されるつもりもないと言いたいのだろう。

罪の無い公僕を皆殺しにした元一般人『速水健一』と禁忌に魅入られたジャーナリスト『柴田英雄』。いつたいどちらが狂っているのだろうか？

『とんでもない口の悪さだけど、予定通りあのオジサンを”協力者”として誘うのかい？』

柴田の狂人的な言動に呆然として本来の目的を見失いかけていた健一にアインツが思い出したように告げる。

「酷い言われようだけど、俺は柴田さんのこと気が入ったよ。絶対に協力してもらおう」

俄然として柴田に魔法の石を探す協力者になつてもらいたいといふ気持ちが強まつた。

客観的に見て柴田の内に秘めた人間性は柴田本人でも御し切れないほど危ういものだ。だが、それを上手く手綱を握り制御することが出来れば心強い戦力になることは必須だろつ。

「おい。さつきから独り言が目立つが……いつたい、誰と喋つてんだ？　てめえにしか見えないお友達と喋つてんなら精神病棟に通うことをおすすめするんだが」

殺氣の消えた雰囲気に柴田は落ち着いた様子で健一に怪訝な顔をして訊いた。

「ああ、そういうえば紹介がまだでしたね。俺の額にある宝石が……」

健一が自分の額の上で輝く”魔法の石”『ジュエルシード』を指差してAINN'Sのことを柴田に紹介しようとした時、異常事態が起つた。

何も無い空間から虹色の輝きが漏れ出した。そして、健一と柴田の一人を囲むように360°。全ての範囲を虹色に輝く結晶体が隙間無く縦に並んで壁を造り出したのだ。

突然、頭上以外の視界を結晶体の壁に塞がれた健一は咄嗟の出来事で動転している柴田を無視してAINN'Sに落ち着いた様子で訊いた。

「生き残りの警察が攻撃を仕掛けてきたのか？」

《つづん。今度の敵は警察じゃない》

AINN'Sの返答に健一は首を傾げた。

『今現在、僕達は射程約500mの範囲内からの狙撃を受けているよ』

「狙撃だつて？ つまり銃器で俺たちを狙つているってことか」

銃器での集中砲火、確かに警察には手におえないほどの制圧方法だ。

健一は耳を澄ませた。すると分厚い結晶体の壁に弾かれる銃弾の音が所狭しと健一の周囲から聴こえて来た。

柴田も自分たちが何者かに狙われて狙撃を受けていることを理解したようで身体を地面に伏せた。

『うん。しかも向こうは健一とオジサンを殺す気満々で狙つてきてるね。今、この場から抜け出したら全方位からの銃弾の嵐で健一は蜂の巣だよ』

アインツの淡々とした説明に健一は銃弾で蜂の巣にされる自分の姿を想像して背筋を凍らせる。

「反撃は出来ないのか」

『今は防御に『HEAD SHOT』の能力を使用しているから無理だ。本来は防御する為の力ではないからね』

「そつか。ならこの盾はあとどれ位の時間もちそうなんだ

『時間の概念で言えば半永久的には保てるよ。一応これでも魔法の盾だ。狙撃銃如きでは盾を貫けないよ』

「それを聞いて安心した。でも「れじやあ、」シリシリありますひも手話まりだな。決定打に欠けるし」

『そりでもないみたいだよ』

「なんだって？」

『複数の生体反応が手に熱量の高い物体を持つてビルに接近しているんだ』

「それがどうしたんだ」

『想像してみて、健一。ビルを内部から多量の爆弾を使って爆発させるとどうなると想いつへ。』

「そりゃあ、ビルの骨組みが壊れてビル自体が崩れるだろ」

『正解。じゃあ、そのビルの屋上で立ち往生している人間はどうなると思いつへ。』

アインツの言いたいことを理解した健一は額に嫌な汗を搔きながら引きつった笑みを浮かべた。絶望の状況では笑うことしか出来ないのだ。

「アインツ、お前は魔法の石だ。そう魔法だ。魔法といつたら空を飛ぶことだりづへ。もちろん、お前の力で空を飛ぶことぐらい朝飯前なんだろ？」

『健一の期待に堪えられなくて残念だけどそれは無理だよ』

「なんだって！？」

予想外のアインツの答えに健一の声が裏返った。

「お前つ飛べないのか！？」

『うん、飛べないよ。あれ？ 事前に言つていなかつたっけ？』

「聞いてないぞ！」

『ゴメンね』

「そうだ、俺がビルの屋上まで瞬間移動で移動出来ただろう？ あれでここからまたどこかに移動するのはどうだ？」

『出来ないこともないけど』『HEAD SHOT』の能力を開中は空間移動は無理だよ。能力を解かないとあれは出来ないんだ』
「マジかよ。能力を解いた瞬間に狙撃銃で俺たち蜂の巣確定コースじゃないか』

『僕にもっと魔力があれば能力を展開中でも移動できるんだけどこればかりは諦めてくれ』

『それじゃあ、ビルから落下する衝撃を殺して着地することは？』

『それは出来るよ。ただし、ひとりだけしか助けられない』

思つた以上に制約の多い魔法の石の力に健一は落胆した様子で力なくその場で座り込んだ。

自分達を守る結晶体の盾の防御を解かないと空間をワープ移動することができない。

防御の盾を解いてワープ移動しようとするとき周囲から狙撃を受け重傷あるいは命を落とすかの一択しか選択肢がない。

そのままビルの屋上で立ち往生しているビル」と爆破されてビルの屋上から地面に落下、落下の衝撃を殺せるのは一人だけ。

健一か柴田のどちらかが死ぬ。柴田を失くすのは惜しい。

「詰んだかもしない」

魔法の力を過信して調子に乗っていた健一は己の力の限界を知らなかつた。

そんな絶望的な状況に健一の口から諦めの言葉が出てしまったのは必然なのだ。

「どうした？ 今にも自殺しそうな若者の顔をしてんぞ」

アインツの声を聞くことが出来ない柴田はずつと健一の独り言を聞いていた。そして断片的にではあるが自分が健一の足手まといになつていることを理解していた。

「どうした。得意のオカルトパワーでなんともならないのか」

「すみません。このままだと柴田さんが死んじゃうかもしません」

柴田を見捨てればこの窮地を跳ね返して生き残ることが出来る。だが、健一には柴田が協力者として必要だと決心してしまった覚悟がある。

「おこおこ。やつはオレのことを殺すなんて言つておいてなんて

「ザマだよ」

「あれはちょっとした冗談みたいなものだったんですけど、本当に俺の協力者になつて頂きたかった」

「協力者だつて？ いつたいなんで」

「アインツ…いや、”魔法の石”『ジュエルシード』を俺と一緒に探してくれる現地協力者が欲しかつたんです。柴田さんはジャーナリストだから情報を集めたり纏めたりするのは得意でしちゃうから、きっと俺の目的の為に役立つてくれる…」

健一は正直に柴田が自分に必要な存在であることを話した。
それを聞いた柴田は落ち込む健一の横に立つと豪快に健一の背中を叩いた。

「馬鹿野郎っ！ それを早くオレに言わねえか！ そんな好奇心のくすぐられることをオレが協力しないわけがねえよ」

バンバンと力強く背中を叩かれて健一は堪らず咳き込んだ。

「なにするんですかっ！？ 痛いですってばー」

「つるせえつオレを虚偽にした罰だ。男なら黙つて堂々と胸を張つていやがれつてんだよ」

まるで父親のような柴田の豪快な物言いに健一は田を白黒とさせて呆気にとられる。

「いいか、オレはてめえのことは気に食わないがてめえの宝探しに

付き合つてやるつて言つてんだよ。このオレに任せれば魔法の石だから漬物石だかなんであつという間に探し出してやるよ

「協力してくれるんですか！？」

「だからさつきからそいつ言つてんだが。ただし条件がある」

「条件ですか？」

「周りを見ての通りオレはてめえと関わつたことで命を狙われるような厄介な事に巻き込まれた。だからてめえは絶対にオレの命を守れ。オレも宝探しに命を賭けてやる。だがてめえはオレの命を守れ」

「……わかりました。柴田さんの命は俺とアインツが守りましょ！」

「僕も一緒に守るのかい？」とアインツが健一に抗議するが健一はそれを無視。

柴田を守ることを約束に彼の協力を得ることが出来た健一は彼の命を守りながら危機的な現在の状況を打破する策を考えようと柴田との話を切り上げようとした。

「まだ話は終わつてねえぞ。あとでめえの宝探しに関わつている間の衣食住を用意しろ。その間で消費する金は全部てめえもちな」

危機的な現在の状況を打破する策を考えていた健一の思考が柴田の提案に寸断され現実に戻された。

「せ、せこひすよ柴田さん！」

「つむせえつ！ 」しつら万年金欠の貧乏ジャーナリストだ。それ

ぐらごろめに見やがれってんだ

「わ、わかりました。なんとかしてみます」

自分の意思で異世界に来たわけではない健一は異世界での衣食住や金銭面での問題をまだ片付けてはいなかつたがこの場は黙つて柴田の要求を呑むことにした。

「それとな……」

「まだあるんですか……！」

「あたりまえだ！」じちじら命を賭けてんだ。まだこんなもんじゃねえぞ」

「その話は後にしてもらひていいですか。この場から逃げ出す方法を思いついたんで」

「チツわかつたよ。オレもてめえも死んじまつたら意味ねえもんな。それで、その逃げ出す方法つてのはどういうんだ」

「口で説明するより実践あるのみです。柴田さん、すこしお歩きますよ

よ

「お、おひ」

覚悟を決めて腹を括つた健一の力が宿つた瞳に気圧されて柴田は黙つて健一の指示に従つた。

健一と柴田の二人の周囲を囲んでいた結晶体の壁が一人が歩くのと一緒に床から10cm程浮いた状態で一人を銃撃から守るように移

動する。

健一たちが移動する間も銃撃は止む事はなかつたが魔法の力で生成された結晶体の盾を貫けるほどの力は現代文明の凶器には無かつた。

「着きました。ソロが俺たちの終着地です、

「終着地つて、本氣で言つてんのか……」

健一と柴田が着いたのは文字通り屋上の端つゝ。そこから一歩足を踏み外したら地面まで真っ逆さまに落下して地面に咲くヒナゲシになるだろ。

「アインツ、これから俺と柴田さんせ」から飛び降つる

「ちよちよちよちよつと待つてえーーー。」

突然のビルの屋上からの紐なしバンジージャンプ宣言に柴田は顔面蒼白で健一に掘み掛かった。

「オレの命を守れつて約束したよなー? なんでこきなつてめえと無理心中しねえといけねえんだよー!」

となんでもなく高い場所から見下ろす地面は眩がして足元がふらつてしまふに心細く、そして恐怖の対象であつた。

「落ちてください。別に自殺するつて意味じゃないですつて

「おおお、落ちてビルの屋上から飛び降りれるかつー。」

「じゃあ、そのままいいです。アインツ、俺の考えどおりにお願いね」

《了解。幸運を》

健一の思考と同調しているアインツは健一が何をしたいのか齟齬なく完全に理解している。だが柴田は健一の考えが理解できていない。

「はあーっふうー……っー」

健一は一度だけ大きく深呼吸すると下の地面を見なによりに正面を向いたままビルの屋上から飛び降りた。

「本気かつ！？ 正気じやねえよー。」

眼下に落ちていく健一の小さな姿を柴田は四つん這いになつて身を乗り出して田で追つ。

《オジサンもこくよ》

「くつ？」

柴田の頭の中に聞いたことのない機械的な口調の声が響いた。そして柴田を銃弾から守っていた結晶体の壁が柴田の突き出した尻を後ろからトンと押した。

不可抗力で後ろから不意を衝かれて押された柴田は頭から地面に向かつてビルの屋上から飛び降りた。

「ふざけんじやねえぞおおおああああああああ！」

健一の後を5秒も経たないうちに柴田は健一を追つよつにアインツに飛び降りさせられた。

健一と柴田が飛び降りた瞬間にビルの屋上で彼らを守っていた結晶体の盾は光の霧となつて一瞬で消え去つた。

そして、結晶体の盾が消え去ると同時に屋上から飛び降りた健一と柴田の肉体を虹色の光りが包み込む。

「いいいいやああああああああ

柴田は自分を包み込む不思議な光の現象にまで気が回らないようで刻一刻と目の前に迫る地面の恐怖に悲鳴をあげていた。

「アインツつ！」

《転移開始》

健一が地面にぶつかるコソマ一秒とないギリギリの瞬間、速水健一と柴田英雄は光の奔流に呑み込まれてその姿を忽然と消した。ビルの屋上から一人の人間が飛び降り、そして光の繭に包まれたかと思つたらその姿はどこにもなかつた。

現実味の無い、でも目を奪われてしまつほどに幻想的な現象の一部始終を見ていた数十人の狙撃手たち全員がその光景に息を呑んで本来の仕事を忘れていた。

これが日本史の中で初めて遭遇する魔法使いたちの転移魔法を目撃する瞬間だつた。

第4話（後書き）

「」意見・「」感想をお待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0645z/>

妄想の世界

2011年12月16日16時47分発行